令和４年度第１回入試改善検討会議会議録

日時　令和４年１２月２６日（月）
午後2時３０分から午後4時３０分まで
場所　さいたま共済会館５０４号室

出席委員　堀田香織委員、小柳光春委員、岩田彦太郎委員、長沢正貴委員、丸山巧委員、佐々木敏夫委員、廣澤健一委員、大森由美委員、宮尾孝委員、土橋徹嘉委員、鈴木香織委員、小熊誠委員、日吉亨委員、加藤哲也委員、田邉広昭委員、金子功委員、臼倉克典委員、渡辺洋平委員、田中邦典委員、松中直司委員、宮本典行委員
欠席委員　小林和夫委員、栗原章和委員、髙岡豊委員、清水雅己委員

１　開会

２　教育委員会挨拶

３　各委員自己紹介

４　設置要綱説明

５　委員長及び副委員長の選出
委員長は堀田委員、副委員長は臼倉委員

６　委員長挨拶

７　協議
（１）会議の公開・非公開について
公開とする。
（２）会議録の署名委員
第１回は、小柳委員と宮尾委員とする。
（３）協議題説明
事務局より
（４）資料説明
事務局より

（５）協議内容（○委員長　◇委員　▲事務局）

○　事務局から、協議題（１）「各高等学校の特色に応じた入学者選抜の在り方について」、協議題（２）「入学者選抜における中学校３年間の多様な活動の評価の在り方について」の説明があった。本日は第１回でもあるため、一人一人に発言をいただきたい。

◇　今の入学者選抜はうまくいっている。中学生やその保護者、中学校の進路指導に浸透させていくことが大切である。また、多様な活動の評価について、中学校側としては、中学生を丸ごと評価してほしい。義務教育は、市町村ごとに凸凹があることはよくない。昭和４０年代に部活動が必修となり、弊害も出てその後任意となったが、中学生が部活動にかける思い、表面的なカリキュラムではなく隠れたカリキュラムも評価してほしい。県学力学習状況調査で、非認知能力が学力に及ぼす影響について注目されたが、部活動は自分をコントロールする、連帯感を持つ、仲間と協調するなど、非認知能力を育む場としてとても重要だと考えている。短期的・中期的・長期的に考え、過渡期の部活動の評価をどうやってするのかしっかり考える必要がある。

◇　部活動の地域移行の提言では、「調査書に学校部活動等について記載する際には、単に活動歴や大会成績だけではなく、活動からうかがうことのできる生徒の長所、個性や意欲、能力（例えば、自ら取り組もうとする意欲や態度、責任感、協調性など）に言及するなど、記載を工夫する必要がある。」とあるが、これを現場が行うのは難しい。前提として、教職員はスポーツで採用されているわけではない。専門外の部活動を受け持つ教員が、生徒・保護者が納得するような文言を調査書に記載することができるのか心配である。現場としても現行制度は定着していて、よくできた制度だと思うが、部活動の地域移行も考えなければならないということは悩ましいところである。

◇　先ほどの部活動の地域移行の提言のとおり調査書に記載するとなれば、教員の作文能力に評価が左右されるのではないかが心配である。また、顧問によって、専門性や評価の基準も変わることも考えられる。高校の評価についても曖昧になるだろう。「多様性」ということで、費用のかかる英検などの試験を評価している高校が多いが、例えば英語で同じ点数を取った受検生が、同じ力なのに英検３級と英検準２級で差がつくこと、貧困による格差について高校入試に反映されていないことは問題である。調査書の記載方法として、例えば、県大会出場だけでなく、レギュラーかどうかを記載させるなど、詳細な記載を求めることはやめてほしい。更に、学校の活動以外のことを記載させることも問題がある。部活動の地域移行にも関連するが、中学校の教員が学校行事以外のものを把握し、調査書に記載することは難しくなる。

◇　学校ごとにスクールポリシーを策定し、それに基づいた入試にするという

ことだが、現在でも目指す学校像や選抜基準を高校ごとに定めており、学校ごとにバラバラでいいのかという懸念はある。どんなに部活動が盛んな高校であったとしても、部活動をしていない生徒が輝ける学校であるべきだと思う。今後、部活動が地域移行していく中で、中学生の活動をどのように評価していくのかが課題である。また、自己アピールなど自分でアピールできるものが必要だとは思うが、それを高校側が入試業務で何百人も評価していくのはかなり難しいし、煩雑にもなる。私立高校の入試日程が早いということも公立高校の募集が厳しい一因ではないかと感じているが、私立高校に入試時期を遅らせてもらうことも必要ではないか。

◇　現在の入試制度は、よくできた入試制度だと感じている。入試業務が短時間で終わる。それだけに、特色ある入試ではないという印象もある。国から言われたとはいえ、特色を出していくことから入試を変えるということはどうなのか、もう少し現場の声を聞いてほしいと思う。とりわけ、入試が後ろ倒しになったことで、入試・卒業式・在校生の進路指導と業務が重なり、現場は多忙化している。働き方改革の視点から、何か新しいことを始めるのであれば、業務の削減（スクラップ＆ビルド）をしてほしい。広島県の入試改革は、かなり唐突な変更で現場は混乱していると聞いている。課外活動も入試で評価していくことに、公平性を保てる制度なのか検討が必要である。

◇　スクールポリシーがどの程度、中学生に理解されているのかということを考えていく必要がある。四字熟語などもあったりしてわかりにくい。中学生は偏差値のフィルターをかけてから、その上で見ているのかもしれないが、私立公立との比較はできていないように感じる。資料４７ページ、埼玉県ではすべての高校で部活動の記録を得点化しているようだが、全国では２県しかないが、それをどうとらえるのか。資料にある、「部活動の記録の活用」は、「部活動の実績の得点化」とどう違うのか。

▲　いくつかの県に聞き取りを行ったところ、部活動の記録の扱いは、各学校に評価をまかせている県が多い。総合的な判断の資料とするとだけ記載があって、具体的な内容まではわからない。

◇　部活動以外の項目として、英検等の検定を受けたが、入試の評価のために、お金を出して検定を受けるのはどうなのかと感じる。生徒や保護者が中学校にアピールして、調査書に書いてもらい、得点化する。できる生徒はいいけれどできない生徒には厳しい。調査書にもっと違うことが書けたらいいのにと思う。また、部活動で、主将・副主将、レギュラーになるとか、役職を取り合いになる。県大会に出れば何点、といったことも話している生徒もいるようだ。レギュラーになれなかったとしてもベンチで応援しているので、そういった生徒も評価してほしい。中学校の先生が高校を知らないこともあるため、中学

校の先生にも高校のことをもっと知ってもらいたい。

◇　調査書は、かつてＡ３判の頃は、担任の作文能力に評価が左右されることがあったのかもしれない。現行はある程度の成果がある。中学校からすれば、頑張った生徒の取組をできるだけ書きたい。一方で、学校外の活動が増えている中で、どこまで書いたらいいのか、職印を押す校長としては悩ましい。部活動の地域移行に関して、まだ不透明なことも多いので、入試改善を並行して議論していくことは難しい。学校が責任をもって記載する調査書は校内の活動に絞って、校外の活動は個人の責任で提出する、そうすると高校での評価の在り方を将来的に議論していく必要が出てくるだろう。

◇　得点開示や調査書の開示、学校説明会などで、高校の情報が広く伝わるようになっているので、とても有難い。現行の調査書では、生徒や保護者にとってやってきたことは書いてもらえるということが浸透している。今後、調査書の変更があるとしても、評価できるところは評価する入試制度にしてほしい。高校から、たまにレギュラーかそうではないか、と聞かれることがあるが、書いてあることをそのまま評価してほしい。

◇　調査書には生徒の良い面をできるだけ書いて評価してもらいたい。成績だけで評価するのは公平ではない。部活動の地域移行に関して、市町村ごとのやり方は異なり差が出るため、部活動に重点を置くことも公平ではない。生徒の特性がわかるような項目は同じように評価してもらいたい。意欲などを調査書で文章表現することは難しい。面接など、本人をみて評価してもらえるとありがたい。

◇　前提として、義務教育を修了する１５歳の真剣勝負であり、公平公正にみてほしい。これを踏まえて４点お話する。１点目、高校説明会に行けるようにしてほしい。コロナもあり、行く機会が減ったように感じるが、高校には行ってみないとわからない。２点目、中学校現場の立場からは入試をもう少し遅くしてほしい。３点目、学校内外問わず、生徒の頑張っていることをすべて認めてほしい。４点目、部活動の地域移行によって受検生に差がでないようにしてほしい。

◇　スクールポリシーの前に、スクールミッションがある。スクールミッションは設置者が定めるとあるので、それとポリシーをどう関連させていくかが課題となる。入試は公平公正であることは前提だが、入試も学校業務の一部分であり、部活動の地域移行という変更によって、入試の変更も必要だろうが、学校の資源は限られているので、どこまで入試業務に力をさけるのかというバランスも考えなければならない。

◇　部活動の地域移行については、教員の働き方改革の視点もあると考えているが、家庭の負担増、教員のやりがいの低下など、さまざまな課題がある。他

県の様子を見ても、高校入試の調査書のうち、部活動の記録については得点化しない学校があってもよい、といったような思い切った検討も必要ではないかと感じている。

◇　高校の選抜基準において、特色ある生徒の募集を行っているところはうまくいっていると感じている。中学校からの調査書については、生徒の良いところをたくさん書いていただいているが、選抜基準で予め示した視点のみで評価しているという実態がある。

◇　高校入試での特別な配慮は、引き続きお願いしたい。現状のスクールポリシー策定に関して、具体的なイメージを持てるものがないので、なかなか議論ができないところがある。部活動の地域移行に関しても同様である。

◇　国の動きと連動しながら、高校が特色を出せる、かつ、中学生の特性や興味関心に合った進路選択ができることが望ましいと考えている。部活の地域移行については、動きは定まっていないが、公正公平な入試となるように模索していく必要がある。学校内外の多様な活動を評価することが重要であるが、生徒・教員に過度な負担となりすぎないようにしなければいけない。また、混乱が生じないように、十分な周知期間をとるなど丁寧な対応が必要だととらえている。

◇　学習指導要領の改訂も行われ、探究活動、ＥｄＴｅｃｈなど、高校だけでなく、中学校も学びが変わってきていると感じている。中学校での学びが変わっているとすれば、それに合わせて、高校入試の問題への対応、学力検査の得点だけで計れるのか、そうでないときに学力検査では計れないことはどう評価するのか、といったことを考えていかなくてはならない。中学生の活動は様々で、部活動だけでない。部活動を軸にするのではなく、中学生自身が中学校３年間で活動したことを、入試の中で高校が引き出してどう評価していくのかということを考えることが必要である。部活動だけでなく、さまざまな観点から生徒を評価する必要があると思うし、逆に部活動に特化して評価するということもあってもいいのかもしれない。様々な観点から今後、入試制度をつくっていく必要がある。

◇　学校としてどのように特色化を図るのかが課題である。選抜の方法を多様化して選抜基準に特色をもたせることも考えられる。一方で、それは効率的ではなくなるのかもしれない。そのバランスをとりながらいろいろな選択肢を持てるようにすることが大切である。部活動を評価することについては、評価する学校があってもよいし、評価しない学校があってもよい。公平性を保つということと、多様な活動を評価することを両立することは難しいかもしれないが、部活動の評価の有無のように、学校によって違いがあってもよいのかもしれない。ただ、どこが違うのかということが明確になっていることが必要で

ある。また、生徒・保護者にとってわかりやすい制度であることも必要である。

◇　スクールポリシーは、学校によって温度差があるように感じている。中学校での部活動がどうなっていくのか、が決まらないと、なかなか議論も進まないところがある。中学校での活動は縮小傾向だが、中学校でやってきたことが評価できる仕組みがあるといいだろう。中学校は地域と連携して、コミュニティースクールとして多様な活動をしている。中学校は入試のためだけに教育を行っているわけではないので、何が評価され、何が評価されないのか、わかりやすい方がよい。

8　諸連絡

次回日程は、令和５年２月１日（水）１３時３０分から、さいたま共済会館

9　閉会

署名

委員長　堀田香織

署名委員　小柳光啓

署名委員　宮尾孝